東松山市の民俗行事をいかに伝えるか

「獅子舞」・「しりあぶり」・「餅つき踊り」

○きらめき市民大学　第 19 期　歴史・郷土学部
○課題研究グループ B 班　東松山市の祭りと民俗行事

Ⅰ．テーマ設定の理由
Ⅱ．聞き取り調査の実施
　１．獅子舞
　２．悪龍退治にまつわる民俗行事
Ⅲ．調査結果の考察
Ⅳ．提言

◎清水宏一　辰巳 宏　本間啓子　内田六平　石川保夫
岩嵜順一　○井上典和　伊藤 勉　山本美津子
(◎リーダー　○サブリーダー)

Ⅰ テーマ設定の理由

東松山の祭りや民俗行事は、市埋蔵文化センターの資料（東松山の祭りと年中行事令和元年(2019))によれば、160 件あまりが記録されています。実際にはその多くは中止され、あるいは規模が縮小・簡略化され、実施されていた行事も大半はおおむね衰退傾向にあります。

かつて市内の多くの地区で開催されてきた獅子舞は衰退し、令和 4 年 (2022) 現在、新型コロナの感染拡大防止のため野本地区 1 か所となってしまいました。この貴重な先人たちの手で守り伝えられてきた民俗芸能をこのまま消滅させてしまうのは、もったいないと考え、衰退の理由は何か、どうしたら継続できるのか、さらにどのようにしたら地域の次の世代に伝えられるのか、という問題意識のもと、調査活動に取り組みました。

岩殿・神戸・金谷の集落では、かつて毎年 7 月 1 日、庭先で小麦の籾殻（バカヌカ）を焚き、家族で尻をあぶる習俗「しりあぶり」がありました。これを岩殿観音正法寺は、坂上田村麻呂の「悪竜退治」伝説と結びつけ復活させました。

また、「金谷の餅つき踊り」は、臼を囲んだ演じ手の息の合った動きの見事さが評価され、県の無形民俗文化財に指定されました。平成 22 年（2010）に演じ手不足により休止に追い込まれましたが、40 代～50 代の人たちの熱意と猛特訓により、8 年ぶりに復活させることに成功しました。

令和 4 年（2022）夏以降、祭りが新型コロナウィルス感染拡大の防止策を施しながらも、3 年ぶりに全国各地で開催されました。同年 10 月 16 日東松山市において、上野本の獅子舞が規模を縮小し、時間も短縮して開催されました。

わたしたちの研究グループでは、このことを念頭に、地域の文化遺産である東松山の各地区の祭りや年中行事を、地域社会の変化や人々の価値観やライフスタイルの変化に対応しながら伝えるには、どうしたらいいのか、何が求められているのか、そのヒントを考えることにしました。

Ⅱ 聞き取り調査の実施

1. 獅子舞

獅子舞は日本で最多の伝統芸能で、約 20 年前の調査では全国に 8,000 カ所といわれています。歴史の古い「伎楽・神楽系」の獅子舞と、室町・江戸時代に流行し、関東・東北に多く伝わる「風流系」の獅子舞があります。

埼玉県では多くが「一人立ち三匹獅子」の「ささら」と呼ばれ、300 以上の地区に約 250 年ないし 400 年前から継承されてきました。

今回の調査では、東松山市の 8 地区の獅子舞を取り上げました。すでに明治時代に中止になり、獅子頭や装束、道具などは地元の神社などに保管されている事例もその対象に加えました。というのは、それらの貴重な郷土の文化財としての価値を考え、後世に伝えていくことの意義もあると考えたからです。

（1）下岡の獅子舞

・開催状況：中止（明治時代後期）
・開催時期：夏祭り 7 月 15 日
・開 催 地：玉太岡神社
・開催団体：各地域の氏子代表と世話役

起源は不明。江戸中期に塗替えを行ったことが雌獅子の内側に記されています。

この地区はその昔、洪水や水害、時には日照りにひどく悩まされ、水神である龍の獅子頭を作って災厄をお祓いし、五穀豊穣を願ったといわれています。

獅子舞をやめた理由は、明治時代のはじめ、二宮尊徳運動(報徳運動)が世間に広まり、勤勉を旨とするその思想は、祭り・獅子舞などの神事や遊興と馴染まず、それが無言の圧力となり、次第にこの伝統行事は衰退していったのではないかといわれています。

（2）大谷の獅子舞
・開催状況：中止（明治時代後期）
・開催時期：夏祭り 7 月 20 日
・開 催 地：大雷神社
・開催団体：各地域の氏子代表と世話役

獅子舞の起源は不明。女獅子に「宝暦四年」（1751）男獅子に「享和元年」（1800）と記されています。

獅子舞は、毎年鎮守大雷神社の豊作祈願の春祭り、五穀豊穣感謝の秋祭りの奉納舞として、また諏訪神社や秋葉神社でも行われてきました。青年による舞の荒い山ザサラでありました。

大谷地区の獅子舞は、代々農家の長男によって受け継がれ、盛大に行われてきたが明治末年を以って終わりを告げました。

獅子舞道具は、かつて獅子元や諏訪社に保管されてきましたが、その諏訪社も廃社となり、その後、鎮守大雷神社に社務所が新設され、道具一式をここに保管することになりました。

（3）上唐子のささら獅子舞
・開催状況：平成 26 年（2014）より休止
・開催時期：天王さま（7 月 24 日と 25 日に近い日曜日）
・開 催 地：氷川神社と合祀の八雲神社
・開催団体：上唐子ささら獅子舞保存会（神社の氏子会計に組み込まれて、開催時には総代 10 名と用番 10 名が援助。演者は全て小中学生の男子のみ）

起源は、太鼓の内側に「正徳三年」（1713）とあります。道具が 2 組あって元々の起源は不明です。戦時中と、昭和 32 年（1958）から昭和 56 年（1981）まで中断し、復活の時に「ささら愛好会」という 27 名の任意団体で活動しました。その後神社の組織に編入し、開催は総代会で決めることになりました。祭りの好きでない人が多数いると、中止になる可能性が高くなります。開催までの 10 数回の練習の時

は、保存会員の他に役員全員が集まりましたが、用事はほとんどないため、この役務が嫌いな人も相当数いました。

中断時に笛の奏者はほぼ全員が亡くなって、復活には非常に苦労しました。昭和 32 年（1958）の総会では、1 票差で中断が決まったと聞いています。復活後も少子化で、ささらっ子がいなければ地区内の女子も加えたらよいではないか、それでも足りなければ大人でも良いのでは、という意見も出ました。役員は、昔から男子のみでやってきたので変更はできないと従来からのやり方を主張し、その結果平成 25 年（2013）を最後に中止になりました。

（4）野田の獅子舞

・開催状況：コロナ禍により 3 年間休止
・開催時期：夏祭り（7 月 15 日）秋祭り（10 月 15 日）獅子頭のみ奉納
・開 催 地：赤城神社と合祀の八雲神社
・開催団体：野田獅子舞保存会

起源は、野田村の名主・長谷部家の獅子頭を納められていた箱に「寛永十二亥年六月創始」（1635）とあります。現在の獅子頭は文久元年（1861）に創られました。大正末期から昭和 23 年（1948）まで戦争により中断、翌年再開しました。

獅子元の長谷部家に獅子頭、祭事の装束、道具などが保管されています。

野田の獅子頭

当日は長谷部家で身支度をして神社に向かいます。獅子舞は、神社の境内ではなく草履を脱いで畳の上で三頭が舞う「座敷獅子」です。

年々、獅子舞を行うのは難しくなっており、それに関わる人が高齢化と共に、費用と時間がかかり、神社の氏子が減少し維持管理が難しくなり、一度やめてしまうと再開は困難と思います。

（5）西本宿の獅子舞

・開催状況：コロナ禍により 3 年間中止
・開催時期：秋祭り（10 月の最終土、日曜日）
・開 催 地：富士浅間神社
・開催団体：西二氏子総代、西一、後元宿、悪戸、米沢の各総代と各当番 13 名

起源は古く、今から約 800 年以上前の鎌倉時代の宝治 2 年（1248）に常安寺が建立された時にまでさかのぼります。同時に境内に神社も立てられ、その時代から当獅子舞は始められたと伝えられています。

獅子舞の奉納は、地域の安全・五穀豊穣、災害除け、悪魔よけとして 10 月の最終土曜日・日曜日に行われます。

10 月の最終土曜日に「揃い」といい、総代宅（その後公会堂に変更）において、常安寺住職柴生田量教さんにより読経が行われます。これを「獅子舞神前奉納祈願法楽」といいます。本番の 10 月最終日曜日の奉納は、宮司・総代・警護（4 名）・笛の本管（2 名）・花笠・中獅子・逸子（はやしっこ）・女獅子・宝冠獅子の順で、公会堂を出発します。富士浅間神社に到着すると獅子舞が奉納されます。

当地の獅子舞は、勇壮活発な獅子舞です。獅子が力強く激しく獅子頭を振り（大狂［おおぶるい］）跳ねて廻るところから「鹿獅子」、また気が荒くて「気狂い獅子」ともいわれています。

昭和 49 年（1974）まで中断していました。中断したのは社会の状況によりとなっているが、おそらく踊り手がいなかったのではないかと思われます。

昭和 50 年（1975）に復活したのは、自営消防団の旅行の時に、獅子舞を復活しようではないかと話が持ち上がったからです。それ以後令和元年（2019）まで開催されていました。

地域の氏子たちが一体となって始めたこの祭りがゆえに盛り上がり、そして続けていくことができるのです。獅子舞は地域の貴重な民俗芸能、文化遺産です。私たちの大切な宝物を後世に残していきたいという声は、地元に根強く存在しているものと思われます。

西本宿の獅子舞

（6）神戸の獅子舞

・開催状況：コロナ禍で 3 年間中止
・開催時期：7 月 24 日と 25 日に近い土曜、日曜日
・開 催 地：神戸神社（古くは牛頭天王宮）氏子は 182 世帯
・開催団体：神戸獅子舞保存会（神社から独立した組織で、会員 15 名。舞い手は小中学生の男子のみ、オカザキは女子も参加可）。

起源は太鼓の内側に「寛政三年」（1791）とあり、もとは善能寺というお寺から出発して「街道笛」に合わせて神社まで行進しました。戦中と、昭和 42 年（1967）から昭和 52 年（1977）まで中断した後、現在に至っています。

必要経費は、住民から1,500円徴収して、東松山市の助成金20,000円とあわせて、行事の収支は赤字にならない程度ということです。

東松山市提供

神戸地区は米どころで、ささらは悪魔払いに加えて、特に雨乞いを祈願する行事となってきました。かつて干ばつの時に、都幾川に行って雨乞いささらを行ったら、帰りに大雨が降ったと伝えられています。毎年神社の前に、藁で小さい俵をつくって土俵を作り、その中で演じます。

少子化の影響で後継者に大変苦労しています。継続の工夫策として、子ども樽みこしをささらの行列に加えたところ、子ども達や家族からも好評です。

（7）下唐子の獅子舞

・開催状況：コロナ禍で3年間休止
・開催時期：7月25・26日及び10月19日の年2回
・開 催 地：唐子神社
・開催団体：下唐子獅子舞保存会

下唐子の獅子舞は武田信玄の家臣馬場美濃守の子孫が、今から350～60年ほど前に長寿の神様である白髭大明神を祀り、獅子舞を奉納したのが始まりとされています。

他地区の獅子舞と同じように、戦前から戦後間もない時期まで中断しています。その後復活させますが、昭和38年から3年ほど再び中断しています。再開したのは、昭和43年（1968）のことで、元の獅子係が唐子神社宮司と相談し、氏子総会で復活することに決定しました。

下唐子の獅子舞は、踊り手は獅子3人、ささらっ子4人、笛方5人(ひとりは頭笛)、全て男子(当初長男)です。必要な費用は、保存会年会費(1,000円×28名)、唐子神社からの補助金、市及び自治会からの助成金などから捻出されています。

獅子頭は、明治時代の中頃に現在のものに作り変えたと言われています。獅子舞一式のほか隠居獅子も、御神庫に保管されています。

（8）上野本の獅子舞

・開催状況：コロナ禍で2年間休止。令和4年（2022）10月開催
・開催時期：秋祭り10月15日に近い日曜日
・開 催 地：八幡神社（氏子約280世帯）

・開催団体：上野本獅子舞保存会（神社から独立した組織で、獅子舞の役人（やくびと）は 80 名。演者は男の大人、笛は男 9 人と女 6 人）

起源は太鼓の内側に「宝暦二年」（1752）とあり、「嘉永五年」（1852）に「獅子頭再調」とあります。

戦時中の中断と、戦後 2 回の開催後、昭和 28 年（1953）から 22 年間中断しましたが、昭和 49 年（1974）に復活して今に至っています。

祭りの資金源は、保存会会費 2,000 円（1 人あたり）と東松山市補助金 20,000 円で、収入も支出も約 60 万円です。

上野本の獅子舞

特徴は、獅子舞に先立ち二人の青年によって、邪気を払い舞庭を浄めるために、棒使いが鹿島神流の棒術を行います。また、6mの高さの万灯を 10 人がかりで持ち運ぶのも他に例がありません。令和 4 年（2022）は 10 月 16 日開催ですが、他の地区の獅子舞と同様に、後継者が不足し困っています。

10 月 16 日に神主の前原さん、保存会の会長岡村さん、地域の皆さんが揃いの法被（はっぴ）を着て 3 年ぶりに上野本の棒術と獅子舞の奉納が行われました。やり終えた安堵感、満足感、笛を吹いていた女性が語っていたのが、とても印象的でした。

2. 悪龍退治にまつわる民俗行事

(1) 岩殿地区のしりあぶり

紙芝居

・開催状況：継続
・開催時期：6 月の第一日曜日
・開 催 地：岩殿観音正法寺
・開催団体：岩殿観音正法寺

岩殿地区には「田村麻呂の悪龍退治」の伝説があります。しりあぶりは、坂上田村麻呂がこの地を訪れて悪龍を退治した際、住民がまんじゅうでねぎらい、季節外れの雪で凍えた体を温めるため尻をあぶりながらまんじゅうを食べたことに由来します。

正法寺では、厄除開運・無病息災を願い各家庭で語り継がれてきた「しりあぶり」の風習を大切に伝えたいと、平成 30 年（2018）から年中行事として行っています。市内の各所でカラーのチラシを配布し、イベントの周知をはかっています。

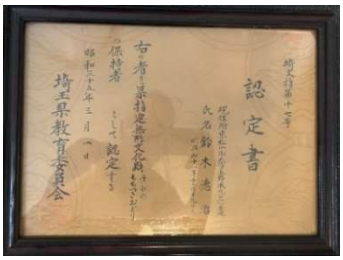
しりあぶり

当日は、最初に子どもたちにも行事の趣旨やその由来をわかりやすく解説するために、紙芝居「悪竜退治」の公演をします。その後、山伏姿の僧侶がほら貝を吹きながら登場し、結界を結び清めた場所に「不動明王」や「千手観音」を招き、煩悩に見立てた木々に点火し、炎が上がるなか「柴燈護

摩（さいとうごま）」「観音経」と「般若心経」を唱えて祈願します。参加者は、願い事を書いた護摩札を手に炎に尻を向けて祈りますが、その姿はとてもユーモラスです。

かつて岩殿観音正法寺の参道には、かやぶき屋根の民家が軒を連ねていました。現在では、昔から受け継いだ「屋号」の木板に、かつての繁栄の面影をしのぶのみです。高度経済成長で信仰心が薄れ、豊かで便利な生活を求めて門前の人々は農業から離れていき、それを機に、昔から伝わってきた行事をやらなくなってしまいました。正法寺住職は、高齢の単身世帯が増え、空き家・空き地が増えていることに将来門前町の消滅への危機感を感じ、「しりあぶりの行事をすることで知っていただき、何とか人を集めてその中から住みたい人が出てくれれば」と願っています。

（2）金谷の餅つき踊り



埼玉県無形民俗文化財認定書

・開催状況：継続（埼玉県無形民俗文化財）
・開催時期：秋祭り 11 月 23 日
・開催場所：氷川神社
・開催団体：金谷餅つき踊り保存会（男子 13～15 名）

前項の「しりあぶり」と同じく坂上田村麻呂による「悪龍退治」に歓喜した村人が餅をついて、将兵をもてなしたことからはじまったと伝えられています。大正時代には、一時廃絶の危機を迎えましたが、戦後いち早く金谷餅つき踊り保存会が結成されました。餅つき踊りは、きちんとした型を持った踊りが最大の特徴です。

金谷の餅つき踊り

そのためテレビやお祝い事、イベントなどの出演依頼が多くありました。しかし会員の高齢化により会員が減り、開催に必要な最低 10 人を確保できず、ついに平成 22 年（2010）休止せざるを得なくなりました。休止して 8 年後の平成 30 年（2018）の夏、地域の夏まつりの打ち上げの席上、参加した子どもの父親や若者から「餅つき踊りを何故やらないのか」と問いかけられました。

その時、保存会の大澤さん（副会長）は、「やり手がいないからだ」「二人や三人ではどうにもならない」と答えたところ、40～50 代の 10 人ほどの若手が「やりましょう、教えてください」と声を上げました。しかし、祭礼まで 3 か月しかない。「彼らには、餅つき踊りを披露させることは難しいだろう。何故なら自分たちは中学生の頃から「餅つき踊り」をやっていたから、そんな簡単に出来る訳がない」。若者たちは、勤め仕事を終えてからの練習に取り組み、自発的に猛特訓をしました。その甲斐あってぐんぐんと成果が出て、「これなら 11 月 23 日の祭典で何とか皆さんに披露できる」という状態に達しました。こうして今まで休止していた金谷の餅つき踊りはまさかの復活を遂げたのでした。「若者の情熱と努力に、感謝、感謝です」。

「祭典当日、若者たちは練習の成果を発揮し、久しぶりの餅つき踊りの披露にたくさんの拍手をいただきました。いつ出演依頼があっても恥をかかない程度に若者たちは成長してくれました」と、大澤さんは安心した表情でした。

かつては農家の長男しか演じ手になれない時代が長く続いていましたが、それが足かせとなり休止になりました。

小さい時から「餅つき踊り」の杵の音を聞き、祭りの当日に振る舞われる餅を、近所の人や家族と一緒に食べた子どもたちは、やがて成人し餅つき踊りの演じ手となり後継者になっていきました。祭りが近づくと週末に十数人の若い人は、引退した高齢の先輩に見守られ、和気あいあいと和やかな雰囲気の中で練習しています。

Ⅲ 調査結果の考察

かつて日本の農村では季節ごとに祭りがありました。神社の境内で神楽舞があり出店・屋台が立ち並び、親戚縁者が集まってご馳走を食べ、楽しい一日を過ごしたという記憶を持つ人は多いと思います。

獅子舞は、江戸時代に世の中が安定して経済的に余裕ができた頃から盛んになってきました。それは「五穀豊穣」を祈願するとともに、天然痘、はしか、コレラなどの手に負えない疫病を追い払う「悪疫退散」の願いが込められていました。同時に、娯楽の少ない農村では、獅子舞などの祭りは貴重な唯一の楽しみでした。

しかし、戦後の高度経済成長期は、農村の姿を一変させました。特に昭和 34 年(1959)前後に 90%まで普及したテレビの影響は大きいと思われます。娯楽の多様化が起こりました。市内のほぼ全ての地区でこの時期に、ささら獅子舞が約 10 年から 20 年間中断されました。食糧事情も良くなって日常的に飲食が自由になり、栄養状態が改善されました。獅子舞の際に獅子頭に付いている紙飾りが落ちたら、競いあって拾って家に飾り「無病息災」を祈願しましたが、抗生物質やワクチンの開発で、神仏に対する「信仰心」あるいは宗教的な心情は薄れてきました。

東松山市においても、各地区の祭りの開催団体は少子高齢化により、民俗行事の演者や参加する子供が減り、指導者や後継者が不足する事態に陥っています。

以前は、二世代、三世代が一緒に一つ屋根の下で暮らしていましたが、家族形態が変わってきました。多くは農業で生活してきた人たちが勤めをすることになり、祭りや行事に参加しなくなりました。

女性やヨソモノが民俗行事に参加できない事例も明らかになりました。元来、獅子舞の演者は農家の長男と決められていた地区が多くありましたが、現在も女性の演者は皆無です。おかざき（ササラの演者）と笛吹きに女性が含まれている地区はありましたが、演ずる土俵に女性は入れない地区もありました。伝統行事にジェンダーの視点は見当たりません。また、ある地区では、ひとりで持てないほど重い万灯を、その年に地区に婿入りした男性に運ばせて、失敗すると笑いものにするという決めごとがありました。東松山に限らず総じて民俗行事は農村共同体というコミュニティのなかで閉鎖的に運営されてきました。これが民俗行事の衰退・中止の大きな要因でした。

Ⅳ 提言

東松山市の民俗芸能は、今後一部を除き衰退の一途をたどることが予想されます。いったん休止すれば、それを復活するのは極めて困難です。そこで私たち課題研究グループでは、民俗芸能の実態調査の結果、以下のような提言をまとめました。

1. 東松山の子ども・子育て世代向けの取り組み

東松山市の民俗芸能を知り理解を深め、楽しく体験できる機会をつくること。

（１）特に小学生を対象とした「出前講座」、子ども・子育て世代の親子の獅子舞・お囃子などの体験講座、入門講座（夏休み中の複数回連続講座）など。

（２）民俗行事の歴史を紹介する写真の展示会（各家庭に残る祭りの写真）など。

2. 地域の若い世代・女性や他の地区の人にも開かれた保存会の組織改革

保存会の事業の中に、親子で楽しめるイベント・催しを加える。例えば「カラオケ大会」、「金魚すくい」のほか「焼きそば」などの模擬店。

3.「祭り会館」（観光施設としての機能を併せ持つ「民俗芸能伝承館」）の設置

(1) 使われなくなった獅子頭、装束、道具類などを市民の文化財として収蔵・展示。なるべく人形を使って、リアルに再現する。

(2) 展示室では市民や観光客を対象に、祭りの道具を展示し、VTR で紹介したりする。文献や資料収集し、公開する。

4.「モデル獅子舞」による保存・伝承

1～2 か所の「モデル獅子舞」を選定し、「東松山民俗芸能基金（東松山お祭りファンド)」により運営する。演者は、市内外から広く募集。

5. 東松山の民俗行事についての実態調査・研究事業を早急に開始すること

調査結果に基づき、「東松山民俗芸能保存・継承基本計画」と、東松山の民俗芸能を市民共有の文化遺産として次世代に継承するための「ガイドライン」を策定する。

＜付記＞最後になりますが調査にご協力いただきました下記の方々に厚く御礼申し上げます。(順不同敬称略)

〇長谷部光子（野田獅子舞）〇正法寺住職中嶋政海（岩殿観音しりあぶり）〇岡村隆充（上野本獅子舞）〇松本公明（下岡獅子舞）〇菊池昭夫（西本宿獅子舞）〇森屋弘一・須田秀行宮司（大谷獅子舞）〇鈴木新一・大澤幸吉（金谷餅つき踊り）〇市川常雄・大野昭一（神戸獅子舞）〇小沢茂夫・長谷部伸良（下唐子獅子舞）〇近江　哲（東松山市埋蔵文化財センター）〇前原利雄宮司

＜参考文献＞

〇東松山教育委員会事務局市史編さん課編（1983)『東松山市史資料編第 5 巻』東松山市

〇あかね会出版編集委員会編（2002)『ふるさと唐子　心をつなぐ祈り、まつり』まつやま書房

〇埋蔵文化センターHP「東松山の獅子舞」「各地区の獅子舞等の比較」東松山市（閲覧日 2022 年 9 月 7 日）